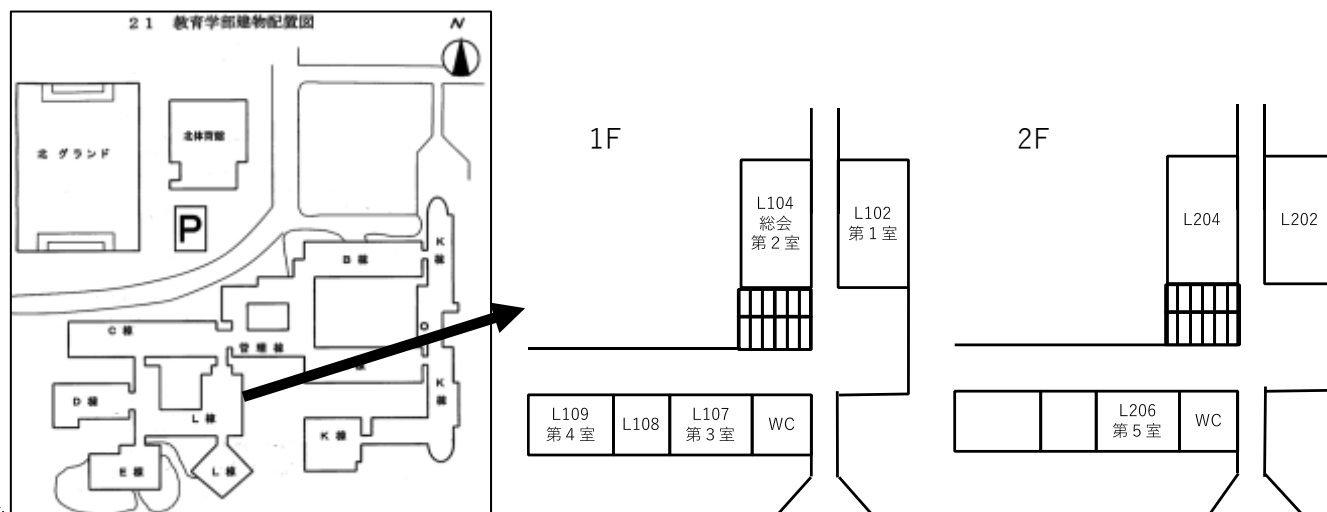


第 48 回中国地区英語教育学会・研究発表会発表要綱集

日 時： 平成 29 年 6 月 24 日（土）
 場 所： 広島大学 教育学部（東広島市鏡山 1-1-1）
 会 費： 正会員：無料 当日会員：（一般 2,000 円，学生（含大学院生）1,000 円（資料代として））
 日 程： 11:00～12:30 理事会（教育学部第一会議室）
 12:00～ 受 付（教育学部玄関）
 13:00～13:30 総 会（教育学部 L 棟 L104）
 13:40～16:30 自由研究発表（教育学部講義棟 L 棟各室）
 17:00～18:30 懇親会（会場：広島大学学士会館ラ・ボエーム 会費：3500 円）

※当日参加も受け付けております。なお、正会員でない方は、当日会員として会費を受付でお支払いください。

【会場内案内図】



研究発表をなさる方は以下の点にご留意ください。

- ・発表時間は 20 分，質疑応答は 10 分とします。
- ・計時係を各室に配置し，20 分で 1 鈴，30 分終了で 2 鈴鳴らします。
- ・司会者は依頼しておりませんので，質疑応答は発表者で行ってください。
- ・発表資料については，30 部程度ご用意いただき，発表の直前に配布してください。
- ・会場にはプロジェクタと RGB ケーブルのみ用意しております。その他，必要な機器類（パソコン，端子変換アダプタなど）は全てご持参ください。

	第 1 会場(L102)	第 2 会場(L104)	第 3 会場(L107)	第 4 会場(L109)	第 5 会場(L206)
13:00～13:30		総会			
13:40～14:10	研究発表	研究発表	研究発表	研究発表	研究発表
14:15～14:45	研究発表	研究発表	研究発表	研究発表	研究発表
14:50～15:20	研究発表	研究発表	研究発表	研究発表	研究発表
15:25～15:55	研究発表	研究発表	研究発表	研究発表	研究発表
16:00～16:30	研究発表	研究発表	研究発表	研究発表	研究発表

第1室：L102

13:40～14:10

スカイプ交流授業の成果－異文化理解と英語習得をめざして

上杉裕子(呉工業高等専門学校)

本発表の目的は、平成28年度に呉工業高等専門学校と長岡技術科学大学との間で、2つの目標①「言語習得」②「異文化理解のための姿勢の養成」を掲げて行った、スカイプ交流授業の成果を検証することである。背景、方法、授業内容、評価法、アンケート検証、TOEICスコア推移、学生からのレポートを総括し、その成果について総合的に報告する。

14:15～14:45

小学校高学年の異文化志向性と英語学習動機づけとの関係

藤居真路(広島県立尾道商業高等学校)

藤居(2011)は、中学1年生について異文化指向性(異文化理解指向性と異文化コミュニケーション指向性)と自己決定動機づけとの関係について探求している。しかし、小学生高学年について、異文化指向性と自己決定動機づけとの関係がどのようになっているのか探求してこなかった。本研究では、その関係について探求し明らかにしたい。

14:50～15:20

児童の発音能力に関する実態調査－復唱・音素認識・音声化に焦点を当てて－

阿部聡生(広島大学大学院院生)

本調査では、児童の英語発音能力と、年齢や発達段階、学習経験との関連を調べた。脳の側面化という要因もあり、子どもは音声の習得に適しているといわれるが、子どもによって発音能力は異なると考えられる。調査は英単語に限定し、発音能力の中でも、復唱能力、音素認識能力、音声化能力に焦点を当てて調査を行った。

15:25～15:55

日本人学習者の英語音調核の韻律的特徴

上斗晶代(県立広島大学)

日本人学習者10人による英語音調核の文中での位置決定、及びその音調の種類などの韻律的特徴について、英語母語話者の音声と比較しながら、音響分析結果に基づいて明らかにする。学習者のイントネーションの明瞭性を5人の英語話者が5段階評価した結果も合わせて考察し、英語音声指導への示唆を提示する。

16:00～16:30

台北と韓国の小学校英語教育事情 2017

渡部靖徳(周南市立岐陽中学校)

筆者は今年度四月、台北市内の小中学校と、韓国ソウル近郷、釜山市内の小学校を視察することができた。内容は授業参観と関係者へのインタビューである。小学校英語の現状についてそれぞれの最新情報を報告したい。

第2室: L104

13:40~14:10

英語科において思考力を育成するための授業 -思考スキルに着目して-

入船弘毅(広島大学大学院生)

本研究では、英語科の授業の中で思考力を育成する授業について検討する。まず、先行研究を概観した結果、思考力に含まれる要素が見出され、さらに、思考スキルの指導の有用性と効果的な思考スキルの指導方法が明らかとなった。また、明らかになったことをもとに、英語科において思考力を育成する授業の展開例を考案した。

14:15~14:45

Journal Writing May Not Always Help: A Case of a Novice Teacher

中川 篤(広島大学大学院生)

教師として成長するためには、実践・経験を積むだけでは不十分で、それらを省察する必要がある。省察法のひとつにティーチングジャーナルがあり、その効用は広く知られている。しかし、その効用以外の側面については未だ研究が少ない。本発表では、ティーチングジャーナルの負の可能性について、ある事例をもとに記述する。

14:50~15:20

優れた英語教師教育者における感受性の働き—情動共鳴によるコミュニケーションの自己生成—

柳瀬陽介(広島大学)

本発表は、感性に関する理論的整理（昨年の発表）に基づき、三名の優れた英語教師教育者の実践を分析する。三名は、高い感受性を通じて、参加者の情動が共鳴するように仕向けること、およびその情動共鳴によりコミュニケーションを自己生成させていたことを授業方法の基盤および授業実践の喜びとしていた。

15:25~15:55

日本人英語学習者の教授言語に対する好みに影響を与える要因

岩中貴裕(山口学芸大学) 中垣謙司(山口学芸大学)

本研究は日本人英語学習者の教授言語に対する好みに影響を与える要因を明らかにすることをその目的とする。調査参加者は高校時代に現行学習指導要領で英語を学んだ79名の学部生である。収集したデータを分析した結果、調査参加者の英語力と英語を使つてのアウトプット経験が教授言語に対する好みに影響を与えることが示唆された。

16:00~16:30

日本人英語学習者による不平発話行為に対する適切性判断の分析

梅木璃子(広島大学大学院生)

本研究の目的は、直接度の異なる不平に対する日本人英語学習者の適切性判断の傾向を明らかにすることである。本研究において、大学生69名を対象に質問紙調査を行った後、その内の3名を対象にインタビュー調査を行った。その結果、日本人英語学習者による適切性判断は、場面における力関係の影響を大きく受けていることが伺えた。

第3室: L107

13:40~14:10

TESOLでの品詞を意識した教授法に基づく論理的英文法指導の提案

佐々木(難波)恭子(鳥取県立米子東高等学校)

高校英文法はその羅列的配列が生徒の理解を阻み、苦手意識に拍車をかけている。この問題の解決のため英語と日本語を比べ、共通点や相違点に注目して文法項目を扱うことで文法体系を生徒に俯瞰させ、論理的英文法理解と定着を促したい。TESOLの文法教授法の考え方を取り入れることで品詞や語順を意識させ、機能に基づいてインプットする授業を行い、その効果についてアンケート結果等を用いて分析する。

14:15~14:45

英語の文型再考—教授文法の視点から—

井口智彰(大島商船高等専門学校)

学校文法の中核である5文型について、その由来を先行研究の概観により提示する。次に、ESLまたはEFLの主要な文法書や文法教科書との比較により、日本の教科書との相違点について議論する。これらの点を踏まえ、文型の理解が学習者の英語理解の促進に役立っているのかどうか、その有効性について検討する。

14:50~15:20

CEFR-Jの語彙と高等学校の検定教科書の語彙との比較

八島 等(広島大学附属高等学校)

本研究の目的は、CEFR-JのB1までの語彙と、改訂されたコミュニケーション英語Ⅰの教科書に出てくる語彙とを比較し、教科書に出てくる語彙が、どの程度、CEFR-JのB1までの語彙をカバーするのを調査することである。

15:25~15:55

中学校1年生入門期における語彙指導の工夫—単語の綴り間違いを減らすことを目的として—

新谷彰男(岡山大学大学院生)

中学校1年生の入門期に、英語を覚えることへの不安や困難を感じる生徒は少なくない。そこで、ローマ字発音の見直しから単語をノートに書いて覚える指導までの過程において、発音指導や綴りの書かせ方などに工夫を行った。その結果、hungryを*hangryと書き間違えるといった綴り間違いに減少が見られるなどの一定の効果があつた。

16:00~16:30

語源を授業に論理的に導入することの効果

佐々木(難波)恭子(鳥取県立米子東高等学校)

英語学習の障壁の1つである語彙取得の補助として語源指導があるが、授業内で羅列的に提示されるのでは学習効率が良くない。本研究は生徒の語源に対する理解を深め、語源知識の効果的定着を図ることを目的とする。語源知識だけでなく単語の成立ちの定義とともに語源を使った活動を授業に取り入れることで、その波及効果についてアンケート結果等をもとに分析する。

第4室:L109

13:40~14:10

英語で進める中学校英語リーディング授業一授業に対する生徒のとらえ方の量的分析一

又野陽子(山口市立鴻南中学校)

中学校で英語のリーディング授業を英語で進める際に、MERRIER Approach、4技能統合、コンプリヘンション・アプローチの手法を用いたリーディング・タスクといった3つの視点を取り入れて授業を行った。本発表では、授業中の各活動に対する中学生の好嫌度と有益性の認識等のアンケート結果を量的に分析した結果と教育的示唆を報告する。

14:15~14:45

英文理解度と英問に対する解答作成力の関連性 — 英問のタイプの違いからの検討 —

浅井智雄(広島県立廿日市西高等学校)

本研究は、高校生の英語学習において、日本語によるテキスト理解を英問に対する解答を英語で書く力へと繋げる道筋を探ることを目的とする。literal、reinterpretation、inference、personal、responseの4つのタイプに分けられた英問に対する英語による応答力を、主として、和文英訳という手段で評価した英文理解度との関連性から分析した結果を報告する。

14:50~15:20

Backward Designに基づく中学校英語授業構築:Super English Classにおける実践研究

虫明美奈子(山口県防府市立華西中学校)

プレゼンテーション発表は、実践的かつ高度な外国語学習の手段として有効であり、特に学習動機づけに有効である(藤田・山形・竹中, 2009; 牧野, 2003)。そのため学習歴が浅い段階においても、自分の意見や思いを学習言語で発信する機会の提供が重要だと考える。本発表では、学習歴の異なる英語と韓国語の授業においてプレゼン発表を実施し、1)発表前後で学生の意識や学習動機の変化と2)言語学習歴によって差があるかどうか検証し、プレゼン発表の有効性を報告する。

15:25~15:55

自由英作文の評価から見られる英語科教員志望大学生のライティングに関するピリーフ

坂本航星(広島大学大学院生)

本研究は、英語科教員志望の大学生が自由英作文を評価する際の評価の観点及びその重要度を調査したものである。結果として、4つの評価スタイルがみられた。これは、英語科教員志望学生の考える「よい英作文」の特徴を反映する。この特徴と標準化されたテストの評価規準・基準との相違点を示すことで、今後の英語科教員志望者が作文指導やその評価を行う際への示唆を提案する。

16:00~16:30

英語集中講座における短期大学生のライティング意識の変容に関する事例研究

仲川浩世(広島大学大学院生)

本研究の目的は、集中講座受講生のライティング意識の変容を探り、今後の指導法を示唆することである。短期大学部2年生2名を対象に、11日間の集中講座の後、インタビューを行った。その結果、「ライティングに対する自己効力感の向上」「教員との直接的なコミュニケーションの促進」など概ね肯定的な変容が見られた。

第5室:L206

13:40~14:10

大学生の英語能力とポジティブ感情の関係

宮迫靖静(福岡教育大学)

人や社会の繁栄をめざし強みや長所を研究するポジティブ心理学(Seligman & Csikszentmihalyi, 2000)が注目されているが、英語教育においてもその影響がみられる。本発表はこの流れのなかで、大学生の英語能力と自己効力感 (self efficacy)・自己概念 (self concept) をはじめとするポジティブ感情関連の感情要因及び L2 学習動機付け要因の関係を探るものである。

14:15~14:45

外国語プレゼンテーション発表に対する学習意識の変化ー学習歴の違う韓国語と英語の観点からー

森原 彩(山口県立柳井高等学校) 金 恵媛 (山口県立大学)

セネック アンドリュウ (山口県立大学)

プレゼンテーション発表は、実践的かつ高度な外国語学習の手段として有効であり、特に学習動機づけに有効である(藤田・山形・竹中, 2009; 牧野, 2003)。そのため学習歴が浅い段階においても、自分の意見や思いを学習言語で発信する機会の提供が重要だと考える。本発表では、学習歴の異なる英語と韓国語の授業においてプレゼン発表を実施し、1) 発表前後で学生の意識や学習動機の変化と2) 言語学習歴によって差があるかどうか検証し、プレゼン発表の有効性を報告する。

14:50~15:20

英語学習における児童・生徒のつまずきと教師の支援の在り方への考察

大谷みどり(島根大学) 飯島睦美 (群馬大学) 築道 和明 (広島大学)

日本の英語教育において小中高大を通し、高度化とコミュニケーション力が求められる中、従来の授業でつまずいている児童・生徒の数は少なくない。彼らがどこで、なぜつまずき、教師はどのように支援することが出来るのかを、山陰地区で教員を対象に実施したアンケート調査結果と関連文献を参考にしながら、具体的な支援方法の例を検討する。

15:25~15:55

英語学習における生徒のつまずきと教師の支援の在り方への考察

飯島睦美 (群馬大学) 大谷みどり(島根大学) 築道 和明 (広島大学)

日本の英語教育において小中高大を通し、高度化とコミュニケーション力が求められる中、従来の授業でつまずいている児童生徒の数は少なくない。子どもたちがなぜつまずき、教師はどのように支援することが出来るのかを、山陰地区で教員を対象に実施したアンケート調査結果と参考文献を参考にしながら、具体的な支援方法の例を紹介する。

16:00~16:30

大学生の英語学習におけるつまずきの研究：インタビュー調査に基づく事例研究

辰己明子(広島修道大学) 兼重昇 (広島大学)

本研究の目的は、大学生を対象とし、英語学習における学習者のつまずきを明らかにすることである。これまでの研究では、学習者の動機づけに関する研究は多く行われてきた。しかしながら、学習者個人に焦点をあてた研究は十分に行われていない。そこで本研究は、大学の英語授業内での活動において、特徴的なパフォーマンスをしている学習者を抽出し、学習履歴や英語に対する意識の変容について、回顧的に調査し、学習者が抱える英語学習におけるつまずきを明らかにする。